

目にみえないもの・ハートにひびくもの

重イオン未知重核研究グループ 井出野 一 実

10日間すごしたハンガリーのブダペストを離れるとき、空港でみかけるハンガリー兵士をさして、“この兵隊たちをみると、ハンガリーの軍隊は強くなさそう”と、かつての実験仲間でパリの国際機関からきたO氏にいった。

ときは1972年の夏。ドナウ川のほとり、ブダ側にある工科大学でNeutron Conferenceがあり、ひとりのりこんでいった。はじめてブダペストの通りにでたときの衝撃がわすれられない。空港から地下鉄で下町ペストの一角にうかびでると、昼というのに、建物のくすんでいること、チョコレート色にちかい。モスクワを朝早くでてから、この暑いなか、口にしたのは飛行機のなかの水一杯だけだ。喫茶店にとびこむ。すると、どっしりしたマダムにどなられる。小さくなってコーヒーを飲む。ところが、その日、半日たつてから、突然ひらめいた。あのマダムは、“Das ist schön!”とあって、びかびかのトランクをほめてくれたのだ。こちらは緊張していて、おこられたとおもったが、音だけは耳に残り、数時間たつて、あとで意味がわかったというわけだ。ことばの音の記憶と意味づけは脳の別の場所で、しかも、時間のずれを伴いながら実行されるものらしい。ここは、かつてのハンガリー・オーストリア帝国の中心地、ドイツ語圏だったのだ。

ついて早々、ホテルのフロントでロシア語をはなしたとたんの相手の変わりよう、その警戒した顔つき。ソ連圏のなかで、ロシア語が歓迎されない国があることを身をもって知った。そのあと、ペストの大通りを歩いて、すぐわかったのは、建物の壁に多くの弾痕ははっきりと残っていること。その16年前の1956年、ハンガリー動乱がおこり、ここブダペストでロシアの

戦車と市街戦があったのだ。また、ロシア語で思い出すのは、会議の途中でパスによる市内観光でのこと。たまたま、パスのなかでロシア人のI. M. Frank先生ととなりあわせた。ここで、また、無邪気に先生にロシア語で話しかけた。ところが、フランク先生は、喜ぶどころか、さっと英語で答えてきた。あの態度は、あきらかに、わたしのへたなロシア語にたいする反応ではない。まだ冷戦が続いていたソ連時代、まわりのロシア人に気がねをしたのだ。物理の国際会議でほんの何日かブダペストですごしただけなのに、歴史の園車が回転している一瞬を体にきざみつけることができた。1989年のベルリンの壁の崩壊が、ここハンガリーから始まったというのも、理由があると、ひとり納得している。

このフランク先生は数年前亡くなり、今、Dubna研究所の中性子物理学部門はFrank Laboratoryとよばれている。実は、この先生には、ブダペストで会う前に、原研で会っている。そのころ、ノーベル賞をもらった人が、原研に初めてくるというので、M部長（当時の）をはじめとして大歓迎をしたことがあった（チェレンコフ・タム・フランクの3人でチェレンコフ効果の発見とその解釈で1958年に物理学賞をもらっている）。水戸の料亭の宴席ですわっている先生の頭を上からみると、その楕円形の短軸と長軸の比は1:3以上の驚くほどの長頭型だった。今も、私にとって、先生の存在が現在形でつづくのは、あの混沌とした時代のブダペストで、私たちの見つけた原子核の中性子共鳴スペクトルの構造にSUPERFINE STRUCTUREという名前を先生がつけてくれたからであり、それを目に見えるようにするべく、戦いが続いているからである。